

連続講座 2016年度の講師陣  
〈震災と文学〉

- 若松英輔 (批評家・随筆家)  
●2016年6月3日 ●「言葉とコトバ―書くことの秘義」
- 柳美里 (小説家・劇作家)  
●2016年7月22日 ●「南相馬からみた震災」
- 土方正志 (荒蝦夷代表) / 川元茂 (プレスアート編集部長)  
●2016年9月16日 ●「震災編集者、熊本へ行く」
- 熊谷達也 (作家)  
●2016年10月14日 ●「震災文学の行方」
- 藻谷浩介 (日本総合研究所主席研究員)  
●2016年10月28日 ●「復興と里山資本主義」
- 渡辺誠一郎 (俳人)  
●2016年11月18日 ●「震災詠・5年後の今―俳句」
- 東雅夫 (アンソロジー・文芸評論家・怪談専門誌『幽』編集顧問)  
●2017年1月20日 ●「震災と怪談文芸と」
- 佐伯一麦 (作家)  
●2017年2月10日 ●「原爆と川端康成」
- 和合亮一 (詩人)  
●2017年2月17日 ●「あの日から詩を書き、探していること、見つけたこと。」
- 平田オリザ (劇作家・劇団「青年団」主宰)  
●2017年3月3日 ●「賢治の祈り、東北の祈り」

共生の大地 東北のために―東北学院大学地域共生推進機構

東日本大震災を経験した後、地域に対して大学が果たさなければならない役割が明確となりました。第一に、災害復旧に果たす大学生ボランティアの役割、第二に、疲弊した地域の産業復興に果たす媒介者の役割、第三に、地域研究を通して地域のあるべき姿を構想していく役割、そして第四に地域を構成する種々の階層の人々と共生を目指していく役割。これらの役割を果たしつつ、地域に深い貢献を成し遂げるために、東北学院大学は地域共生推進機構を設立いたしました。

- まちづくり/減災クラスター支援部門
- 地域を担う人材の育成/地域人材育成・教育研究支援部門
- ボランティア・地域福祉/市民協働部門
- 多様な人材によるコミュニティ創造/多文化共生・国際交流部門



JR仙台駅から徒歩20分、地下鉄「五橋駅」または「愛宕橋駅」から徒歩5分。バス停「福祉プラザ前」から徒歩5分。「五橋駅前」から徒歩6分。

\*一般用駐車場はございません。ご来場の際は公共交通機関をご利用ください。

企画・コーディネート/有限会社荒蝦夷

〔写真〕  
震災直後の2011年4月に誕生した工藤大和くん(右)と妹の結愛ちゃん。宮城県南三陸町。2016年5月5日付「河北新報」掲載(撮影/渡辺龍)  
仙台市若林区荒浜小学校。2017年5月(撮影/小野みほ)

東北学院大学地域共生推進機構

連続講座

震災と文学

2017年度  
前期5回

―危機の時代に―

赤坂憲雄

学習院大学教授  
福島県立博物館館長  
遠野文化研究センター所長

2017年6月2日(金) 18:00~19:30

「東北独立文学論」

熊谷達也

作家

2017年6月30日(金) 18:00~19:30

「〈仙河海シリーズ〉第1期を書き終えて」

山下祐介

首都大学東京准教授

2017年7月14日(金) 18:00~19:30

「復興と地域の未来」

柳美里

小説家・劇作家

2017年9月8日(金) 18:00~19:30

「小高で本屋を開く」

三浦佑之

国文学者  
千葉大学名誉教授

2017年9月29日(金) 18:00~19:30

「古代文学にみる災害」

会場/東北学院大学土樋キャンパス ホーイ記念館ホール(地階)

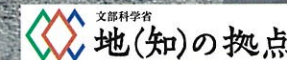
受講料/無料 (どなたでも受講できます)

申込方法/氏名・年齢・住所・連絡先(電話番号、メールアドレス)、受講希望日をご明記の上、ハガキ、FAXまたはEメールにて事前にお申込みください。

【お問合せ・お申込み】東北学院大学 地域共生推進課 〒980-8511 仙台市青葉区土樋 1-3-1

TEL:022-264-6562 FAX:022-264-6522 Eメール:kikou@staff.tohoku-gakuin.ac.jp

\*申し込みをお受けした後のお返事はしておりません。基本的にお申し込みいただいた方すべてにお聴きいただけるよう準備をしておりますので、上記いずれかの方法でお申し込みの上、当日会場へお越しください。





# 赤坂憲雄 2017年6月2日(金) 18:00~19:30

## 「東北独立文学論」



**あかさかのりお**◎学習院大学教授、福島県立博物館館長、遠野文化研究センター所長。1953年、東京都生まれ。東京大学文学部卒業。著書に『岡本太郎の見た日本』(岩波書店/ドゥマゴ文学賞、芸術選奨文部科学大臣賞、河北文化賞)、『異人論序説』(ちくま学芸文庫)、『東北知の鉅脈』『福島へ/福島から赤坂憲雄エッセイ集 福島民報(日曜論壇)2004~2013』(共に荒蝦夷)、『3.11から考える「この国のかたち」東北学を再建する』(新潮選書)、『震災考 2011.3-2014.2』(藤原書店)、『東北学/もうひとつの東北』(講談社学術文庫)など。



# 熊谷達也 2017年6月30日(金) 18:00~19:30

## 「〈仙河海シリーズ〉第1期を書き終えて」



**くまがいたつや**◎作家。1958年、宮城県仙台市生まれ。東京電機大学理工学部卒業。『ウエンカムイの爪』(小説すばる新人賞)、『漂泊の牙』(新田次郎文学賞/共に集英社文庫)、『邂逅の森』(文春文庫/山本周五郎賞、直木賞)のほか、東日本大震災後の架空のまち「仙河海市」を描くシリーズに『リアスの子』(光文社文庫)、『微睡みの海』(角川文庫)、『ティーンズ・エッジ・ロックンロール』(実業之日本社)、『希望の海 仙河海叙景』(集英社)、『揺らぐ街』(光文社)、『浜の甚兵衛』(講談社)、『鮎立の海』(文藝春秋)など。

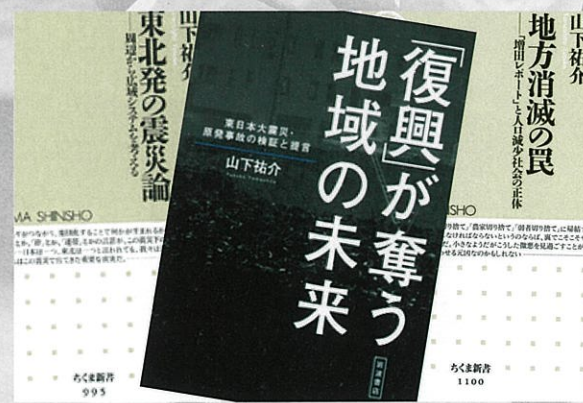


# 山下祐介 2017年7月14日(金) 18:00~19:30

## 「復興と地域の未来」



**やましたゆうすけ**◎首都大学東京都市教養学部准教授。1969年、富山県生まれ。九州大学大学院文学研究科社会学専攻博士課程中退。弘前大学准教授などを経て現職。主著に『限界集落の真実 過疎の村は消えるか?』『東北発の震災論 周辺から広域システムを考える』『地方消滅の民 「増田レポート」と人口減少社会の正体』『地方創生の正体 なぜ地域政策は失敗するのか』(以上、ちくま新書)、『人間なき復興』(共著、ちくま文庫)、『「復興」が奪う地域の未来 東日本大震災・原発事故の検証と提言』(岩波書店)。



# 柳美里 2017年9月8日(金) 18:00~19:30

## 「小高で本屋を開く」



**ゆう・みり**◎小説家・劇作家。1968年、茨城県生まれ。著書に『魚の祭』(角川文庫/岸田國士戯曲賞)、『フルハウス』(文春文庫/泉鏡花文学賞、野間文芸新人賞)、『家族シネマ』(講談社文庫/芥川賞)、『ゴールドラッシュ』(新潮文庫/木山捷平文学賞)、『命』(新潮文庫)、『ファミリー・シークレット』(講談社文庫)、『まちあわせ』『JR上野駅公園口』(共に河出文庫)、『ねこのおうち』(河出書房新社)、『人生にはやらなくていいことがある』(ベスト新書)など。東日本大震災後に福島県南相馬市に移住。南相馬市のFMラジオ局でレギュラー番組を担当。



# 三浦佑之 2017年9月29日(金) 18:00~19:30

## 「古代文学にみる災害」



**みうら・すけゆき**◎国文学者・千葉大学名誉教授。1946年、三重県生まれ。成城大学大学院文学研究科国文学専攻博士課程単位取得退学。『村落伝承論 「遠野物語」から増補新版』(青土社/上代文学会賞)、『口語訳 古事記』(文春文庫/角川財団学芸賞)、『古事記を読みなおす』(ちくま新書/古代歴史文化賞みやざき賞)。ほか『古事記講義』『古事記を旅する』(共に文春文庫)、『風土記の世界』(岩波新書)、『古事記・再発見。神話に隠された神々の痕跡』(KADOKAWA)、『古事記学者ノート 神話に魅せられ、列島を旅して』(青土社)など。



### 企画主旨

東日本大震災の発災から5年目となる一つの大きな節目を通過し、さらにあの日から6年の月日が流れました。しかし、復興、生活再建はまだ道半ばと(も)いう思いを抱かざるをえない方々がまだ多数おられることを、私たちは折々のニュースなどを通じて知る事が出来ます。また、他方では震災体験や復興支援が日々風化している現状が心配されています。

震災を経験し、私たちは「生きる形を問い直し、新しい軌跡を作っていかなければならない。文学は、今を生きる人々の生きる形の模索とならなければならないであろう。震災が機縁となって私たちに考えることを強いたこの問いを前にし、私たちはここに「震災と文学」という考える場、生きる形を問う場所を設けたいと思う(佐々木俊三・前地域共生推進機構長)」という言葉のもつ意義は「今において」なおさらに大きくなっていると考えます。

著名な講師陣が教室で皆様に直接語りかける時間と空間は、書籍を通じてのものとは違った、その一つひとつが個性的で魅力的な世界を紡ぎだしています。講義内容はもちろんのこと、こうした生の雰囲気を感じることが講座ではきっとお楽しみいただけることでしょう。多くの皆様のご参加、ご来場をお待ちしております。

阿部重樹(東北学院大学学長室長・地域共生推進機構長)

私たちは危機の時代を迎えている。資本主義経済のグローバル化もたらした世界規模の格差の深刻化、消費文化と技術文化の過剰な拡大、環境の破壊、グローバル化への反動としての排他的なナショナリズムの高揚、さらにこうした問題を解決するための基軸となる社会的理念の失効。すなわち危機にあって、それを乗り越えるための推進力それ自体を喪失しているかのように見える深い危機の時代を私たちは生きている。

しかし、(危・機)が(危うい時)であるが故に根本的に新しい何かを創出する(機会)でもあるとすれば、私たちの生きている時代はむしろ、(希望)をたくり寄せる可能性を秘めた時代でもある。

危うさの中でこそ姿を見せる希望があるのではないか。危うさの中でしか捉えられないような希望があるのではないか。あるいは死の近さの中でのみ見出される新しい生の形があるのではないか。「被災地」が、世界を覆う危機が集約する中心の一つであり、死の近さが刻み込まれた地であるとすれば、この地はラディカルな希望を語る事が宿命づけられた地ではないだろうか。

本講座では、言葉を磨くことで新しい何かを垣間見せる力としての文学の一つの足掛かりに、(危うさ)の中心でラディカルな(希望)をたくり寄せる試みである。

郭基煥(東北学院大学経済学部共生社会経済学科教授)